



ふくりゅう

特定非営利活動法人

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成15年5月25日

通巻31号

第3回世界水フォーラムに参加して

谷口 尚弘(日本下水道協会・本会評議員)

世界の水事情

去る3月16日～23日にかけて、第3回世界水フォーラム(3rdWWF)が京都、大阪、滋賀を会場に開かれました。国内では余り例を見ない大会議で182カ国から約24,000人の人々が参加しました。

今回の会議の大きなテーマは、国連ミレニアム目標「2015年までに安全な飲料水を利用出来ない人々の割合を半減する」(2000年9月)及びヨハネスブルグ・サミット宣言「2015年までに基礎的な衛生施設を利用出来ない人々の割合を半減する」(WSSD,2002年8月)、この二つの目標をフォローする意味がありました。

この目標の背景にはWHOが指摘する次のような世界における水事情があるからです。

- ・世界人口のうち11億人はきれいな水を手に入れない
- ・24億～30億人は適切な衛生設備を持たない
- ・年間400万人(8秒に一人)の子どもが水に関わる病気で死亡
- ・途上国における病気の80%は汚れた水が原因

さらに、2000年現在世界人口は約60億人ですが、これが2025年には80億人に増加し、絶対的に水が不足している国が31カ国から48カ国に増加すると推定されています。また、洪水や干ばつが激化し、水・食糧不足に起因する地域紛争が発生すると予測されています。今やグローバル化が急速に進む中で、世界の水問題は途上国のみではなく先進国にとっても重要な意味を持っていることを認識する必要がある訳です。

水道分科会での議論

今回の3rdWWFは水に関わる大勢の団体が参加しました。そのため、分野別にいくつかのグループに分類され、下水道分科会は「水供給、衛生及び水質汚染」という共通テーマで21の分科会から構成されるグループに入りました。水道や下水道を含めた衛生が一緒に議論されたことは大変良かったと思います。

国連ミレニアム目標は安全な飲料水の確保が重点ですが、水さえ確保されればそれでよいのかという問題意識が当分科会にはありました。例えば、水道が普及するのはよいのですが、その後のことを考えまじかかって日本で経験したように水質汚濁という新たな環境破壊を引き起こしてしまいます。ですから、主題を「排水管理と水質汚濁防止」とし、安全な水の確保と適切な衛生施設の整備は表裏一体であると主張したのです。途上国の都市は急速な人口増加が大問題になっており、適切な衛生施設としての下水道へのニーズが高まっております。一方、農村部でも改良トイレや浄化槽、腐敗槽などのオプションから地域条件など様々

な状況の下で最も相応しい手段の選択が求められます。したがって、ヨハネスブルグで安全な水供給に衛生が関わったことは大変意味のあることだったと思います。

実際に議論の中では、WSSCC(水供給衛生協調会議)は先ず手を洗うことから衛生教育を行うWASHキャンペーンを行っているように、下水道以前のより基礎的な問題が提示され、問題解決の困難さを改めて思い起こされた次第です。因みにWASHはWater, and Sanitation(公衆衛生)Hygiene(保健衛生)の略でもあります。パネルディスカッションでNPO代表の方が環境を考えていくと教育の問題に突き当たると発言されたとき、会場からは大きな拍手が起きました。これは参加者の共感を示す象徴であったように思えます。

閣僚宣言

水フォーラムの成果は閣僚会議に反映され、その一部ですが、以下のような内容を含む宣言文が採択されました。

上記二目標を達成するには、水供給及び衛生施設に対し莫大な投資が必要である。各国がこれらの目標を達成するための戦略を策定するよう呼びかけると同時に公的部門、民間部門双方において、財政的・技術的資源を動員するための集団的努力を増加させる。

短期的には水供給と衛生施設のサービスを改善するとともに、長期的には費用効果の高いインフラ投資、健全な運営・維持管理を行うために、各々の地域事情、管理能力に即して水供給及び衛生施設の改善に取り組む。その場合、貧困者の安全な飲料水及び衛生施設へのアクセスを向上させる。

これらの宣言の中で注目したい項目がありました。当研究会が永年課題としてきたことが宣言の中にも取り入れられたことです。すなわち、「伝統的な水に関する知恵の存在を認識するとともに、子供も含め広報と教育を行うことにより、流域での人間活動が水循環全体に与える正と負の影響への自覚を喚起する」とあります。

今回の会議は扱う範囲が極めて広いため、全体像を把握するのは困難です。しかし、我々のグループでの議論からキーワードを抽出してみますと、私見ではありますが、環境、教育、貧困(Genderを含む)、衛生施設、流域管理の5つが注目されます。

なお、当研究会からは酒井代表が科学技術パネル「資源の乏しい人々のための適正な水と衛生：絶え間ない挑戦」のセッションにパネラー参加されました。

今年度は当会もこれらの問題についての意識をもちつつ、活動を行うこととなります。会員皆様のご参加を是非期待しております。

てるてる坊主から雨水学まで 日本下水文化研究会から学んだこと

長尾 愛一郎（雨水利用を進める全国市民の会）

この3月、日本下水文化研究会の定例研究会で酒井彰さんの発表「都市生活者は雨と生活のかかわりをどう考えているか」を傍聴する機会があった。2001年に行われた「都市の浸水リスクについてのアンケート」の報告を兼ねたものだった。

都市雨水に起因する環境リスクとして浸水リスクと環境汚染リスクを上げ、リスクをもたらし背景や原因を分析し、リスクの軽減策を都市雨水管理計画によって導入する研究の一環としてアンケート調査が実施されたのである。アンケートの結果、都市生活者の浸水リスク・環境汚染リスクの認知レベルは高くないが、適切な情報を提供することによってリスクの認知レベルが向上することが明らかになった。

このアンケートには私たち雨水利用を進める全国市民の会（以下、市民の会）も協力させていただいたことから、定例研究会には市民の会から3名が参加した。

この発表を聞きながら、下水文化研究会からこれまでに多くのことを学んできたことに改めて気づいた次第だ。私自身の水への関心の推移を含め、その点を振り返ってみたい。

*

1984年ころのことだった。淀川流域は枚方市に暮らす主婦から「私たち大阪の住民は京都のオシッコを飲んでいるんです」という発言を聞いて、私は都市の水問題に一拳に引き込まれてしまった。宇治川、木津川、桂川の三川が淀川に合流する直前に下水処理場が集中している。その放流水を大阪府の浄水場が水道原水として取水することから、淀川上流域の大阪市民はまずくて臭くて危険な水に悩まされていたのだった。トリハロメタンによる水道水の汚染が新聞報道を賑わせ始めていた時期である。

それ以来、飲み水の汚染や環境破壊の現状に関心を持ち続けてきた。そのうち、汚染を追及するだけでは不十分だと感じはじめ、雨水利用東京国際会議（1994年8月）の実行委員会に参加して、具体的な課題のために行動することの大切さを学んだ。

日本下水研究会との出会いはこの会議のときだったと思う。セッションのひとつで稲場紀久雄さんが「てるてる坊主の研究」を発表された。てるてる坊主の源流が神道にあり、後に仏教がかかわって大衆化したという説は興味深かったし、「ふれふれ坊主」の存在や、京都・貴船神社の黒馬（祈雨）と白馬（祈晴）のように雨乞いと晴乞いがセットになっていることを知って雨のテーマがますます魅力的なものになった。市民の会では、2001年12月に3年半に及ぶ編集会議を経て「雨の事典」を出版したが、稲場さんに「てるてる坊主」の項目の執筆をお願いしたことはいうま

でもない。

その後、市民の会主催の「95雨水フェア」雨水でまちを守る」では、1月17日に勃発した阪神・淡路大震災の教訓を踏まえて、「現代下水道の欠陥と対策」のテーマで稲場さんにお話しいただいた。稲場さんは、「疫病の予防」という現代下水道の原点に立ち返り、緊急時に下水道機能の代替処置を講ずることが重要であると強調された。芦屋市内の公園の池で水浴びする人がスライドに映し出されたが、その映像は今も目に焼きついて

いる。2000年8月の雨水フェア in すみだ「何故まちは雨に弱くなったか」では、酒井彰さんが「雨から遠ざかった都市生活」のタイトルでお話をされた。99年7月に新宿区西落合で起きた地下室への浸水による死亡事故が事例であり、ハザード要因（被害をもたらす危険要因）の蓄積によって降雨による浸水リスクが高まることの検証だった。都市生活者の水に対する感受性の麻痺も人的なハザード要因のひとつだが、それを都市の病理と指摘されたことは強い印象を残した。では都市型水害に対しては何をしたらよいのか。リスクマネジメントによって備えるべきだという答えが用意されており、その手法には説得力があった。

2003年3月21日～22日に「世界水フォーラム雨水利用 in 京都」が京（みやこ）エコロジーセンターで開催された。雨水利用に取り組む市民、事業者、研究者、行政のネットワークを作るための会議だ。まとめの分科会「雨水学を語ろう」で酒井さんがパネラーの一人として問題を提起された。都市雨水計画学の立場から、従来の学問領域を超えて人と水循環系をつなぐ視点が盛り込まれた内容だった。

下水文化研究会から学んだことは多いが、とりわけ教えられたことは、会の名称である「下水文化」にこめられ



定例研究会参加者

た内容の普遍性である。また、問題を解決したり計画を設計する際の手法の緻密さである。下水文化とは、個人と下水、社会と下水の付き合い方が成熟した段階に入っていることを意味する。研究会の活動に即して私なりに補足すると、文化の概念が成立するためには、水環境を自分の問題としてとらえその悪化に気づく感性を持つことが不可欠である。技術への過度の依存を制御できるか否かも文化の成熟度にかかっている。地域や国家が継承してきた歴史や伝統を尊重したり過去の災害から教訓を引き出して未来へ生かす姿勢も文化のあり方のひとつである。

以上の前提には市民一人一人が下水道への理解を深め、他人まかせにしない参加意識が求められている。

今、水に関心を持つ人であれば誰でも、限られた水資源といかに付き合うかという課題に直面せざるを得ないだろう。雨水利用や雨水浸透への取り組み、上水道や下水道の見直し、湧水や水みちの解明・復元、水を浪費せずに資源化も図る尿処理システムの模索、雨水循環をはぐくむ建築など、さまざまな試みや実験がなされている。そのとき、下水文化研究会がいう「文化」の概念をそれぞれの立場でいかに中身のあるものにするかが問われている。

シリーズ・博物館めぐり（第2回）

竹中大工道具館

稲村 光郎（本会運営委員）

大工といえば、古くは日光東照宮の左甚五郎、谷中五重塔ののっそり十兵衛などのフィクション的な人物から、近年は法隆寺の西岡常一などの名工がすぐに思い浮かべられるほど、日本人にとってなじみ深い存在である。

東京・新宿の「建築道具館」では、栃木在住の宮大工・赤穂新太郎の所持していた128種586丁もの道具を展示している。宮大工は、西岡によれば、生活のために働いているのではない、その点が並みの大工とは違うという、いわばこだわりの工芸家であるから多くの道具を持っていても不思議ではないが、当館によれば江戸時代の生活のために働いていた普通の大工でも既に180丁近い道具を持っていたというから驚く。江戸時代に、大工道具が安価なものであったとも思えないから、大工にこれだけのものを購入する購買力があったということになる。

その資力はどのようにして得たのであろうか。「江戸東京博物館」によれば、慶応2年（1866）、火災に遭った日本橋の米屋では、大工に1522両、左官に664両、材木商に1097両を支払っている。

そして問題は火災頻度である。例えば徳川將軍家の重臣として知られる榊原家の略年表が、東京「千代田区立四谷資料館」によって作られているが、それによれば1682～1730の約50年間で、上・下屋敷等を併せ5回延べ9件も火災、地震による被害を受けている。また高松藩松平家のそれを見ると同様に1772～1817の約50年間で8回延べ9件の火災に遭っている。また一回の規模が大きいのもこの時代の特徴で、東京・新宿「消防博物館」には明暦など江戸の三大火災の被災地図が示されているが、江戸市内のほとんどの地域が焼け落ちている。

このように見てくると、江戸の大工の資力を支えたのは、「江戸の華」とまで言われた火災であったのではないかと思われ、実際に江戸東京博物館は「火事は、結果として富の再分配の役割を果たした」と言っている。

15世紀の大鋸（おが）の登場によって、板が容易に得られるようになり、製材業が生じたことから判るように、大工道具の発展は近世以後に著しく、ここに収められている道具の多くは近世～近代のものである。

道具職人によって作られ、大工によって使いこなされ、研ぎに研いで短くなった刃は見る者を圧倒させる。また光った刃先は、日頃の手入れをうかがわせるものがある。また、ほぞ組など木組みの展示にも、力をいれており、あくまで木造の日本建築にこだわった博物館である。

よく知られているような曲尺とぶんまわしなどで生きた幾何学の計算をしてのけた、伝統的な大工仕事は、今でも継承されているのであろうか。電卓やパソコンの時代には、というより規格化されたプレハブ住宅が旺盛を極めている現代には、もはや消えつつある技術なのかも知れない。ということで、ここには50本ほどのビデオライブラリーがある。伝統的な工法、道具の使い方などを記録するため、この種の博物館には絶対に必要であり、かつ欠かせないものだと言ってよい。

大工、左官、船大工などの道具を収集展示している博物館は、当館以外にも個人によるものも含め、いくつかあるが、技術者の卵を育てるといふ博物館の教育的役割からすれば、建物と大工道具との間を結ぶ、構造、工法に関わる展示館も欲しいところである。ともあれ、このような博物館を設立、運営している竹中工務店の見識を高く評価したい。

（案内は下記アドレスを参照）

<http://www1.sphere.ne.jp/tknk-mse/annai.htm>



春日権現記絵巻（1309年）より

中川神社再建にご協力を！！

祠を石造りに 中川翁の情熱と森の大切さを次世代に語り継ぐために

昨年9月に多摩川水源林の基礎を築いた恩人中川金治翁を偲ぶ会が開かれ、中川神社維持基金が設立されました。本会は下水文化支援費として本基金へ10万円の拠出を致しました。その後、偲ぶ会に参集した方々が何度か会合を持つうち、木製のままでいつまでも補修していくわけにはいきまい、限界に近い中川神社を石造りで再建してはどうかという意見が大勢を占めるようになり、上流側4名、下流側10名が発起人となり中川神社再建委員会が発足し、下記趣意のもと喜捨を募ることとなりました。

会の財政事情は非常に厳しき折、ここは個人の意思でご喜捨いただきたくご案内いたします。ふだん、源流関係の企画へ参加したくてもできなかった会員各位はこの機会に参加をお考えください。なお、会員以外の方からも広く参加いただけるよう、この趣意書は本会ホームページにも掲載いたします。水源となる森の保全に関心をもちたれておられる方をご存知でしたら是非ご紹介いただきたく存じます。

(酒井彰)

趣 意 書

多摩川流域に残された美しい森は、流域の住民と多摩川の河水の宝です。私たちは、この宝物を貴重な財産として、未来の人たちに引き継がなければならないと考えます。

多摩川に今もこの美林が保たれている理由(わけ)は、2万1千ヘクタール余の水源林を中心とした広大な森林が立派に維持され守られているからです。私達は、現在この美林の限りない恩恵を受けています。私達は、この森林の大切さをいつ迄も語り伝えていきたいと思っています。

源流の美林を作る原動力だった人が中川金治翁です。中川翁は、いまから百年前(1902年)、多摩川流域に入り、山梨県の丹波山村、小菅村、塩山市そして東京都側の奥多摩町の人々と心を合わせ、手をつないで、森林を作る仕事を始めました。そして山里の人々から『奥多摩の主』と崇められました。

中川翁は岐阜県の人で、東京都水道局の職員でしたが、その温かい人柄は、山里の人々の心をひきつけ、山の御爺と慕われました。林業を営む人、谷川で山葵を

作っている人、山奥で猟をする人、ソバやアワを栽培する農家の人々、その他源流域で生活する人々こそ、昭和10年中川翁が退職する日に合わせ、源流域の真中でしかも富士山が一望にできるサオウラ峠の景勝地に小さな木の祠を翁の生存中に建て、そして、いつまでも山や森を守って欲しいと“山の神”として奉りました。



石造りの祠のイメージ

この祠は30年後、村人の手で再建されました。その後38年が経過し、目下、木製の第二の祠も限界に至っております。このまま、祠を朽ち果てさせるには忍びません。

そこで、私達中川翁の暖かい志と美林に賭けた情熱を伝えたい有志が集い、祠を石造りとし、併せて神社への道標や案内板も整備することと致しました。

どうぞ、この趣旨をお汲み取り頂き、下記によりご喜捨頂きたくご案内申し上げます。尚、この浄財をもって再建の祠には皆様のご芳名をタイムカプセルに納め、或いは、台座に刻み末永く保存して参りたいと考えております。

平成15年4月吉日

記

1. ご喜捨の内容：下記の通りですが、できるだけ一口以上頂けたら幸いと存じます。

- 一口壹万円の口の場合；ステンレス製の銘版にご芳名を刻み併せてタイムカプセルに納め保存します。
- 一口参千円の口の場合；芳名張に記して、タイムカプセルに納め保存します。

2. 振込先：J A クレイン（農業協同組合）丹波山支店
(TEL 0428-88-0221)

口座番号 普通預金 7804865、

口座名義 中川金治翁を偲ぶ会 代表 伊藤 巖
尚、お振込みの場合の領収証は振込み元の領収証をもって代えさせていただきます。

3. ご案内・お問合せは下記にご連絡ください。

中川神社再建委員会

代表 伊藤 巖 山梨県丹波山村2578

TEL 0428-88-0308

副代表 藤森正法 東京都荒川区東日暮里

5-16-1-2102

TEL 03-3801-4848

以上

なお、日本下水文化研究会会員では藤森さんのほか、下記の方々が発起人となっております。ご質問・お問合せなどしていただければと存じます。

稲場紀久雄、斉藤博康、酒井彰、谷口尚弘、中村隆一、橋本祐弘（五十音順）

第19回し尿研究会例会報告

3月15日(土)、東京・飯田橋のボランティアセンター会議室において、栗田彰氏(本会評議員)から「江戸小咄から拾った雪隠と屎尿」と題しての講話がありました。江戸小咄集は、江戸時代の初期から幕末までの間に900冊余も刊行されているそうです。今回はそれらを抜粋しまとめた「江戸笑話集」(岩波書店)、「江戸小咄集1・2」(平凡社)に載っている32冊分から、「雪隠」、「屎」、「尿」、「肥取」、「屁」、「肥代」、「手水」などに関する30程の小咄を紹介・解説してもらいました。江戸小咄は、「有馬の身すぎ」のように落語の「有馬小便」の原話になっているものや、川柳と係わりの深いものもあるとのことでした。

江戸小咄にみる江戸時代の便所、屎尿事情の一端を次に紹介します。

大きな家には家の中に便所があった。普通は、便所は母屋から離れた所につくられた。

人出のあるところには、共同便所あるいは貸し雪隠がつくられた。

立ち小便をされては困る所には、「此所小便不用」の札をつけた。

江戸では小便は「どぶ」にしていた。また、馬子は馬をひき道を歩きながら小便をした。

主人が用をたす時、家来はしゃがんで控えていた。「小便をする」という言葉には、品物を買う約束を止めるという意味があった。

男は袴を着けたまま小便をしていたようである。日を定めて肥取りが来た。

大家が肥取りから金を借りることがあった。

手水場は、本来、手や顔を洗う所だが、後に「厠」の名称にもなった。

けんか相手を罵倒する時、「屎(くそ)とも思わぬ」あるいは「屎(くそ)を食らえ」と言った。

第20回し尿研究会例会のお知らせ

日時：平成15年6月13日(金)18時30分～20時30分

場所：東京ボランティアセンター・市民活動センターセントラルプラザ10階A会議室

電話：03-3235-1171

新宿区神楽河岸1 1

JR、地下鉄 飯田橋駅下車 徒歩1分

演題：「便所の神様」

講演者：小松 建司氏(東京都下水道局)

内容：様々な現世的な「ごりやく」があるとして、民話や伝承の世界で語り継がれている「トイレの神様」について、民俗学の分野の諸文献に当たった結果を皆様にご披露するものです。

「トイレ考・屎尿考」の出版記念会(兼 第20回例会)開かれる

先に「ふくりゅう」紙上で予告しました、本会分科会「し尿研究会」が編集・執筆しました「トイレ考・屎尿考」が4月25日、技報堂出版から刊行されました。新書版240頁で、31の話からなる「はなしシリーズ」としての出版です。

「し尿研究会」では、4月27日(日)14時から、都内・渋谷の貸し会議室「ルノワール」で例会を兼ねた出版記念会を開催いたしました。当日は、本会代表の酒井彰氏、技報堂編集部長の小巻慎氏も参加され祝辞を述べられました。この後、し尿行政、下水道行政のPR映画(それぞれ「し尿のゆくえ」、「汚いと言ったお嬢さん」)のビデオ化したものを上映しました。ともに昭和30年代半ばに制作されたもので、今となってはたいへん貴重な「お宝」的な実写がふんだんに使われています。静かな写真とは異なり、動きのあるフィルムの迫力は感動的でした。

最後に、わざわざ京都から駆けつけてくださいました山崎達雄氏(本会会員で本書の著者の一人。京都府庁勤務)から、「京都屎尿事情」についての講話がありました。原史料を大切にしている山崎さんらしく、古文書、古い法律文の逐条解釈を交えての1時間でした。

江戸時代には、あの京都の先斗町(ぼんちちょう)辺りの高瀬川沿いに肥桶を積み出す「肥場」が置かれていたそうですし、また、屎尿の臭気の発散を防止するために「防臭薬」が

発明され、これの使用を義務づけた規則が明治8年に定められたそうです。ともすると東京周辺の情報に偏りがちな「し尿研究会」としては、地域による違いをあらためて実感させられ、地理的にも時系列的にも、また分野的にもなお一層幅広い情報の収集が望まれることを痛感しました。

(記：地田修一)



出版記念会参加者

関西支部・本年度の事業計画（案）を決定

平成15年4月25日に平成15年度第1回運営委員会が開かれ、本年度の事業計画と予算案を決めました。

- 1) 7月に総会を兼ね講演会、パネルディスカッションを開催する。
- 2) 9月に大阪府下水道フェスティバルに参加する。
- 3) 11月に見学会を京都で開催する。
- 4) 機関紙（仮称 関西支部だより）を発行する。
- 5) その他：他のNPOとの交流、情報交換、研究会、勉強会等を会員の要望によっては企画する。
- 6) 本部からの助成金と一部参加費を財源にして17万円の予算とすることとし、運営する。

パネルディスカッション（支部総会）ご案内

日程と場所と内容が決まりました。関西の会員の方に

は案内状を送付してご案内しますので、多数のご参加をお待ちしております。

日時 7月20日（日）午後1時30分～4時30分

場所 大阪NPOプラザ（大阪市福島区吉野4-29-20）

議事次第（案）

13：30～14：20

基調講演 勝矢教授「水文化と上賀茂神社」

14：30～16：30

パネルディスカッション「水と暮らしと下水道」

なお、関西支部ホームページが開設されています。支部総会の詳しい内容、設立の経緯、予算の詳細などもこちらまでどうぞ。URLは<http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>です。

（関西支部長 木村 淳弘）

運営委員会・事務局より

会費納入のお願い：この会報とともに会費請求書、振込用紙を同封させていただきました。よろしくごお願い申し上げます。なかには、2 - 4年間にわたり未納の会員がいらっしゃいます。本会では、意思表示がなければ退会扱いにはしないこととしており、こうした会員の方にも請求書を送っております。財務状況の厳しさをご理解いただき、速やかな会費納入をいただきますようお願いいたします。

昨年度決算を終えたところ、会の財務事情がたいへん逼迫していることが判明致しました。会員サービスの質を落とさず、運営していくためには新たな収入の方途を見出していかなければなりません。そのために、総会では定款の一部改定も提案しておりますが、会員各位におきましてもよきアイデアなどお寄せいただければ幸いです。

5ページで出版記念会の報告を掲載いたしました。トイレ考・尿尿考を会員の皆様にお届けいたします。ご期待ください。（この会報と前後するかもしれませんが。）

今回の会報紙面でもおわかりのように、会の活動内容が多岐にわたり、同時に会員の関心の対象も個人個人で広がり

がみられております。また、本会の運営はNPOとして会員の活動への参加により成り立つものでもありますので、今後は、より多くの事業を運営委員以外の方にも広く参加いただく実行委員会方式で運営していきたいと考えております。積極的な参加をお願いします。

総会議案書でもご案内のように、これまで本会を立上げられるとともに、永年、中心となって運営に携わってこられた、稲場紀久雄、谷口尚弘、栗田彰の3氏が運営委員を退かれ、今後は評議員としてご指導いただくことになりました。運営委員会の弱体を懸念される向きもあるかもしれませんが、その意味でも会員各位の積極的な参加をいただきたいと存じます。

3月に開催された水フォーラムでも大きなテーマとなりました「水と衛生」を本年度の事業のテーマと考えたいと思いを増す。水フォーラムで酒井が参加したセッション・レポートでは、本会も「水と衛生」の普及にとつての適正技術について検討し、その考え方を広めていく任を担うことを約束しました。その主旨で研究発表会なども考えていきたいと思っております。

編集後記 ▶本会し尿研究会の著作となる「トイレ考・尿尿考」が技報堂から出版されました。本会の叢書は、これまでいずれも単著であり、会の活動も個人の力量に依存してきた傾向があります。協力による成果を作り出していくこと、そうした場を設けることが会員拡大のきっかけにもなるように思います。▶この本の内容は、多くの国では衛生＝下水道ではないということを前提に、「水と衛生」を考えるうえでも貴重です。▶今年の2月から3月にかけて「雨」に関するイベントにいくつか参加しました。長尾さんには、これまでの経緯を含めて寄稿していただきました。▶そうしたイベント終えて、昨年お知らせした東本願寺の方々、「雨水利用を進める全国市民の会」の方々との懇談の機会をもつことができました。そのなかで、地域において東本願寺が果たすことができる役割は多様であり、お寺を今一度大きく社会へ開いていきたいとの意向が示されました。本会としても微力ながら協力できればと思います。（酒井 彰）



ふくりゅう 通巻31号目次

第3回世界水フォーラムに参加して	1
照る照る坊主から雨水学まで	2
博物館めぐり(第2回)	3
中川神社再建にご協力を	4
し尿研究会例会・報告とお知らせ / トイレ考・尿尿考出版記念会	5

特定非営利活動法人
日本下水道文化研究会
〒162-0067 新宿区富久町6-5
NJS富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129
jade@jca.apc.org
aan63630@syd.odn.ne.jp

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご欄ください。
<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>